

Action2

木がつなげる私たちの暮らしと地域



木には名前があります。スギ、ヒノキ、アカマツ、ホオノキ、トチ・・・。人の名前と同じで、知っている
と親近感がわくものです。そして、それぞれの木には
故郷があります。スギは日本中にありますが、温暖湿
潤な気候を好み、高山や非常に寒いところは苦手です。
ヒノキはもう少し乾燥したところにも生育し、アカマ
ツは強風や乾燥にも耐え、荒れ地でも育ちます。ホオ
ノキ、トチは湿った土が大好きで、森の中に咲くホオ
ノキの大きな白い花は、芳香を放ちその存在を知らせ
てくれます。一つ一つ知ると、「木」と一括りにする
にはもったいないくらい。

長い年月をかけて育つ木には、生きてきた年月や環
境が刻まれています。一年中温暖な熱帯の木は、一般
的にははっきりとした年輪がありませんが、寒暖差の
ある日本では、夏の間の成長と寒い間の成長との差が
年輪となって現れます。一本の木の中でも、斜面の上
側か下側か、気象条件が厳しかったか良好だったかで
年輪の幅は大きく変わります。こうして見ると、まる
で人間が育つ過程のようです。

山の木が育つ過程では、誰かが畑で苗を育て、急な
斜面を背負われて運んで、誰かに植えられた後も他の
雑草に負けないように草刈りをしてもらい、他の木に
負けないように周囲の木を伐ってもらい、と色々な人
の手が入ります。自然に生えた木も、リスや鳥に種を
運んでもらったり、風に乗って運ばれたりという偶然
の後、信じられないほどの生存競争を経て大きくなり
ます。そして、山に生えていた木が、目の前の机や日
用品に姿を変えるまでには、長い時間をかけて伐る、
運ぶ、乾かす、加工する、といった工程を経ます。

何気なく座った駅の木ベンチは、実はすごい歴史
をもっているのです。

あなたの周りにはどんな木がありますか。四角い木
が沢山貼り合わされたもの、断面を見ると、層状に板
が貼り合わされたもの、ちょっと変わった模様をして
いるもの、色々なものがあるはず。一体何という
名前ですべてどこで育ち、どんな人が関わったのでしょうか。

木が育まれた風土やその地域の歴史、木に関わっ
てきた人たちの営みなど、その木が紡ぐさまざまな物語
を想像してみると、そして知ってみると、きっと心に
彩りを与えてくれると思うのです。

地域への誇りと愛着を伝える

アメリカ・シアトル発祥のスターバックスが日本に上陸して24年。人々の心を豊かで活力あるものにするブランドとして、地域の文化や技に敬意を払い、地域に根差した場所として、日本各地の豊かな素材、食文化や伝統の技術を、スターバックスならではの視点で表現する、商品づくりや店舗設計を行っています。めざすのは、地域の人たちと一緒に、地域への誇りと愛着を高め、伝承していくこと。

地域材を活用した暖かみのある空間づくり

そんな想いから、いま、地域の木材を活用した店舗づくりに力を入れています。全国にたくさんある森林資源がうまく使われず、放置された人工林が荒廃する悪循環に陥っている日本。「だからこそ、地域とつながるために、日本のどこにでもある森林を、地域ごとの背景を大切にしながら活用したいと考えた。」(中川拓真さん)「暖かみがあって人が落ち着ける空間づくりが、経営のサステナビリティに重要。店舗設計に当たり、自然と、暖かみのある木材を内装や家具を使うことに」(米山大樹さん)。



2020年3月に新宿御苑内でオープンした新宿御苑店



大阪・梅田のLINKS UMEDA 2階店では、大阪産のクリの木や、おおさか河内材の杉をふんだんに使用

「まちの暮らし」と「身近な森」を結ぶ

“JIMOTO table”は、「森をつくる家具」をコンセプトに、国産材の家具づくりにこだわってきた、(株)ワイス・ワイスとの共同プロジェクト。地元の森で育まれた木を、その木の個性を知る地元の職人が手間をかけて加工した、世界でただ一つのテーブルが店舗に届けられます。大阪・梅田の店舗では大阪産のクリの木やおおさか河内材の杉、新宿御苑の店舗では多摩産の杉とヒノキが、コミュニティテーブルに使われています。たくさんの木々に包まれる空間で、都会の暮らしが、実は森につながっていることを気づかせてくれます。

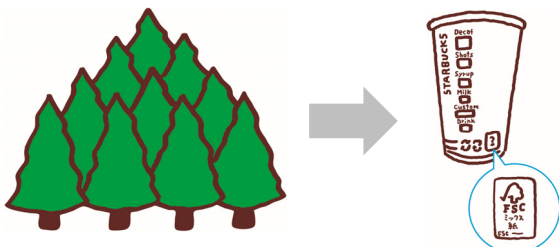
1杯のコーヒーを通して、サステナブルな未来を

自然の恵みであるコーヒーを扱う企業ならではの、サステナブルなアイデアを店舗のあちこちで見ることができます。ペーパーカップ、ナプキン、レシートなど紙製品には、FSC®認証紙を使用。業務用のミルクパックやソイミルクパックも、FSC®認証製品を調達しています。また、和歌山の森の間伐材とコーヒーを抽出したあとの豆かすをミックスし、地元の熟練の漆器職人が手塗り仕上げた“リサイクルビントレー”を全店舗で使用。

「おいしいコーヒーのために水は重要。水の源である森林保全とサステナブルな調達に向けた取組を行い、消費者に近い立場として発信していきたい。」(普川玲さん、酒井恵美子さん) 1杯のコーヒーには、地域や地球のサステナブルな未来がつまっています。

森を守る森林認証

森林認証は、法令遵守や労働安全などの基準を満たして適正に管理された認証森林から生産される木材等を、生産・流通・加工工程でラベルを付すなどして分別し、表示管理することにより、消費者の選択的な購入を通じて持続的な森林経営を支援する仕組みです。国内には、国際的な認証制度である FSC®認証やPEFC認証と、日本独自の認証制度であるSGEC認証 (PEFC認証と相互承認) があります。



スギだらけな遊び場の誕生

2019年夏、山形県高島町に、屋内遊技場「もっくる」がオープンしました。木質部分の88%が高島町産のスギで作られた、木のぬくもりにあふれる空間の中で、天気を気にせず思いっきり遊ぶことができます。

子育て世代にはおなじみのボールプールをスギで作った「すぎだまプール」、地元の名産品をスギで表現した「さくらんぼの木」「ラフランスの木」、子どもだけの秘密基地のような「ぼうけんひろば」。迫力がありつつもどこか愛らしい、赤鬼や龍のオブジェは、高島町から生まれた童話「泣いた赤鬼」「りゅうの目のなみだ」をモチーフにしたもの。開館後の半年で、町の内外から5.5万人の方が訪れたといいます。



旧体育館の天井高さを
利用した開放的な遊び
のスペース。



(写真：太田拓実)



(写真：太田拓実)



(写真：太田拓実)

親父が仕事しているのを久しぶりに見た！

「もっくる」の木材調達を担当したのは、ウッドデザイナーの谷知大輔さん（現パワープレイス（株））。30代半ばの若者が、単身で東京から高島町に乗り込み、使用するスギの伐採・製材・加工、施設の施工といった一連のプロセスのコーディネートを行いました。こだわったのは、可能な限り町の木材を使い、地元の業者に加工してもらうこと、そして、関わった全ての事業者が納得できる価格で仕事をできるようにするということ。また、生き物である木は、強度や含水率、木目などが、1本ごとに少しずつ違ってきます。それを見極めながら、耐久性とデザイン性が両立した施設をいかに作り上げるか。延べ17業者の調整に駆け回る日々が続きました。

高島町のスギの中には、これまで十分に手入れがされていなくて、建築材として使いにくいものも少なくありませんでした。また、冬は丸太が凍るから製材はやりたくないとかきらめていた工場も。発生する困難を一つ一つ乗り越えるうちに、小規模で細々とやっていた地元の工場が、町の顔となるような施設の木材を挽いたのをきっかけに誇りを取り戻したこと、その仕事を見て製材所の息子さんが喜んでいたり、とても印象に残っている、と谷知さんは語ります。

“タニチシステム”が作る地域の未来

「地域の木材を使うためには、品質管理やコスト管理など目に見える業務だけでなく、地域の人たちのつながりやこころ・誇りを大事にしながら、地元の技を引き出していき、目に見えないことが大切」（谷知さん）。今回、取り組んだコーディネートの仕組みは、“タニチシステム”と名づけられました。日本の各地で眠っている森林資源や地域の人たちの想いを形にできるよう、タニチシステムの挑戦は続きます。

木をつかうのは、コンクリートや鉄を使うよりも、ちょっと手間がかかること。でも、その手間を乗り越えた先には、地域のみんなの笑顔が待っているはずです。



カミキリムシの幼虫による木材の変色や節などの意匠も内装利用を許容することで、地元の木材のみで約9割の供給量を確保。



深川の桜並木とテラス。



木材の伐採前にお払いの儀式を行う上・下流域の人々。

「深川川床（かわゆか）」プロジェクト

東京・深川。江戸時代に材木商の紀伊國屋文左衛門が邸を構えたとの言いつたえが残る街で、川沿いに木造のテラスをつくる構想のもと、社会実験がはじまっています。京都・鴨川の「川床」のような、水辺のにぎわいのなかに、深川の歴史と文化を融合させる、情緒あふれる構想です。

その昔、山から伐り出された木材は、川の流れにゆられて、下流の街まで運ばれていました。人々も、船に乗って、上流と下流を行き来して、経済や文化の循環が生まれていたのです。

深川も、かつては材木屋が立ち並び、荒川の上流で伐採された木材がたどりつく場所でしたが、時代が進み、物流の姿が変わるにつれて、上流との交流は途だえていきました。

木を通じて人と物の循環を

「深川川床」プロジェクトは、“木を通じて川上と川下をつなぐ”がコンセプト。荒川の上流に位置する埼玉県小川町の80年の森から伐り出したヒノキを使って、川沿いにテラスをつくり、水辺のにぎわいの創出をめざします。偶然、生産森林組合長が深川の出身だったことも手伝って、深川に住む人たちが伐採や製材の現場を見に行くなど、上流と下流の交流も始まりました。

プロジェクトを主導するのは、竹中工務店の高浜洋平さん。「近年頻発する台風などによる水害は、上流と下流のつながりを考えるきっかけになるように思う。都市に住む私たちが、山と水の恵みを感じられるような、人との循環をつくっていききたい」と語ります。

樹をまとう

縁樹の糸（えんぎのいと）

地域の文化を伝える「木の服」

多くの日本人のふるさとである農村。五穀豊穡を祈念した神社仏閣や祭り、自然のものを使った工芸品などに囲まれた暮らしは、地域の森林に支えられてきました。

そんな地域の文化と森林とのつながりを、新しい形で伝える挑戦をしているのが、『縁樹（えんぎ）の糸プロジェクト』です。このプロジェクトでは、文化財や工芸品の製造工程で出た端材や間伐材を微粒子にし糸に紡ぎ、衣服や雑貨、インテリアなど身の回りの様々な繊維製品を作っています。「木の服」をまとうと、樹木由来の自然の風合いとほのかな木の香りが身体を包みこみ、新しくもなつかしい木のぬくもりを感じさせてくれます。

これまでに、大阪岸和田のだんじりに使われたケヤキ、京都の伝統文化を育ててきた北山杉、奈良吉野山の杉檜、世界遺産高野山の御霊木、六甲山の間伐材などで木の服が作られました。何十年、はたまた何百年と、地域に寄り添った樹木を服としてまとい、地域の文化や精神を未来へ伝えます。



1. 木の服は職人が一つ一つ手織りしています。2. 六甲山の杉を紡いだスカーフ。3. 高野山の杉檜を紡いだスカーフ。4. 樹木から生まれたカーディガン。5. 自然の癒しで心地よい木布のマスクも展開。

memo



ウッドデザイン賞とは、木の良さや価値を再発見させる製品や取組について、特に優れたものを消費者目線で表彰し、木材利用を促進する顕彰制度。ロゴ表示は、ウッドデザイン賞受賞作品であることを示す。